

	<p>エッセイ</p> <h1>東北の被災地を訪ねる</h1> <p>SCE・Net 小林浩之</p>	<p>E - 36</p> <p>発行日 2011.08.15</p>
---	---	---

南三陸町防災庁舎を見たとき、あの遠藤美希さんの声が耳について、胸がつまり涙が流れてきた。34度の蒸し暑い日、汗と涙がしばらく止まらない。



南三陸町防災庁舎

誰もが、無口で、卒塔婆や千羽鶴や花などが置かれた祭壇で線香を捧げていた。祭壇は自然に誰かが置いた仮設であつたらう。しかし、それは、もうそのまま一年以上になるのだから。これが、今の被災地である。

ここに 2 枚の写真がある。1 枚は鳴子温泉での集合写真と、南三陸町防災庁舎の写真である。この旅行に参加した人物の集合写真もスナップ写真も鳴子温泉で撮ったものはあるが、南三陸

町や石巻で撮ったものは誰も持っていない。この旅行に参加者がどう感じたかを物語っている。

私達の旅行は初日、大崎市の鳴子温泉を訪ね、二日目に南三陸町と石巻市を訪ねるといふ旅程であつた。今は静かで、緑の美しい山間地に戻つた大崎も震度 5 強以上の地震に襲われた被災地であつたが、震災直後は南三陸や石巻などへの救援の基地として血みどろになつて、活動したのである。

古川駅集合とあつたが、参加者 12 名の大部分の人は「やまびこ 57 号で」到着する。7 月 26 日 13 時すぎのことである。東北地方もこの日、梅雨が明けて、蒸し暑い日であつた。迎えていただいたのは宮城大学食産業学部矢野教授である。原子核工学を専攻された先生がどうして、食産業学部の教授となられたかと言うのは聞いても理解しにくい。民間での時間が長いのだが、これが日本の原子力が置かれた立場と言う気もするし、接点といえば食の安全性とかバイオマスとも言えるが、一般の学のいい加減さとも言えなくはない。加えて、矢野先生は順応性と柔軟性に長けた気さくな、お人柄というのは、すぐにわかつた。宿泊は鳴子温泉の仙庄館という観光旅館であつたが、その女将は先生の義姉にあたられ、

東北旅行記

そのような縁もあって、随分、気安く、気を遣っていただいた。この旅行の快適さは先生に負うところが大きい。その旅館が使っているマイクロバスが差し回された。古川駅を出たのは13時30分前である。47号線を北上する。47号線は宮城県仙台を出て古川を経て鳴子を通して奥羽山脈を越え、山形県酒田にいたる。旧道は庄内藩が参勤交代に使った道であり、芭蕉の奥の細道では、曾良とともに、尿前（しとまえ）の関を経て鳴子から、出羽越えをする。さらにさかのぼれば、義経はこの道を逆に行き、途中から、平泉に抜けたとある。鳴子は歴史の古い温泉場なのである。陸羽東線の鳴子温泉駅の前を過ぎて、尿前の関の近くに、日本こけし館がある。こけしの歴史は意外に新しく、二百数十年前当地に入った木地師が子供の玩具としてわが子に与えたのが始まりで、鳴子だけでなく東北各地の温泉地で発展したとあるが、鳴子は特に有名である。こけしは子供の健康な成長を願うお祝い人形と聞いたので、孫の二人の女兒のためにこけしを2体購入した。こけし館を出て、少しわき道を入れて、鳴子峡に寄る。古川からここまで、勿論、津波の被害はないが、震度6強から5強にいたる地震の揺れにみまわれた。倒壊した古い墓石をとり換えたと思われる、新しい墓石の墓地が見られることはあったが、現実に家屋の倒壊などの被害は殆ど無かったという。しかし、鳴子峡では、地震による崖崩れのため、川の流れるところまでは降りていくことは出来なかった。緑の壁の向こうにせせらぎの音を聞き、緑の隙間から、トンネルを抜ける陸羽東線のディーゼルの姿を見るにとどまった。震災がなければ、マニアの撮影スポットとなっていたに違いない。それでも、穏やかな自然を十分に楽しめた。鳴子峡を出て、旅館の持つブルーベリー園に寄って、ブルーベリー狩りを行った後、鳴子温泉郷中山平温泉 仙庄館に着く。鳴子温泉郷の中でも最も標高の高い位置にあり、もう山形県は近い。鳴子温泉郷自身は古いが、この旅館は、東北の鄙びた温泉の和風旅館というより、多くの観光客を収容できる鉄筋コンクリート造りの観光ホテルと言ったほうが良い。



鳴子峡にて (道木英之氏提供)

泉質は単純硫黄泉とある。湯の花と臭いのある温泉らしい温泉である。湯はどの旅館も、かけ流しで、豊富という。矢野先生のお世話で温泉熱を利用する熱電発電のパイロット機が設置されている。宿に入ると早速、好意のひと悶着ある。山側の部屋が用意されて、一度入室したところで、先生は鳴子峡にいたる川側の部屋が良いとクレームをつける。女将は部屋の準備が出来ていないと、お客に東北弁で文句を言いながらもやってくれる。そういう雰囲気なのである。

ここも震災直後は約半年間避難所として提供され、165人の方が過ごされた。

又、しばしば、離れた避難所の方に、温泉を提供したという。被災地域の皆さんもそれぞれに、色々な支援をされたのであるが、今はそのことを知るようなものはもう無かった。

食事とお風呂を前に、矢野先生の講演が始まった。演題は「放射線問題と再生可能エネルギー」、語れば尽きない演題であった。原子力なるもの、原子力発電なるもの、制御すべき放射線、放射線に使われる単位の解説から始まって、

- ・ 放射量はどうかわってきたのか
- ・ 放射線は危ないのか 規制値
- ・ リスクの問題 タバコとの比較
- ・ 食品の規制値
- ・ 低線量の問題
- ・ 低線量は本当に危ないか

(以上は、先生の資料を引用)

と議論が進み、予定の時間が過ぎて足早では、あったが、最期に再生可能エネルギーについて、主に太陽熱発電、先生の分野であるバイオマス発電にふれられた。

纏めには下記のことが、記述されている。

- ・ 低線量率の人体への影響について早期判断が必要。低い規制値が風評被害を拡大している。感情論を排し科学的、総合的な判断が必要。
- ・ 再生可能エネルギーはコスト負担に耐えることが課題である。災害対策用独立分散型に適する。

(以上は、先生の資料を引用)

私も殆ど同意したい。現在の放射線の問題については、日本人が時々陥る思考形態なのだが、魔女狩り、不安扇動型の論理的でない姿勢となっている。サイエンスやエンジニアリングを横に置いて、感情論、心理学で論じようとしているのには、大きな危惧がある。これを煽るような学者もいるのだから、お話にならない。根拠も無く、安心できないという理由だけで規制値が下げられて、実際には生産者は困っている。加えて、風評被害は無しにはならないという指摘をされたのである。技術者なら当然そういう思考をすることもあるべきと思う。再生可能エネルギーについても、その経済性や安定性の面から懐疑的な進め方も必要である。現在の買取制度においては、評価のしようもない。技術は沈滞し、利をとるのは海外メーカーとも言われている。原発、放射線など危険なものは無いほうが良いに決まっている。化石燃料でない再生可能エネルギーも使いたい。それだけの議論なら科学も技術もいらない感情論で終わる。ほとんど、感情論をイデオロギー的にしか語れなくなった理科系出身の二人の首相の罪も大きい。

今年4月、食品の摂取管理基準は大幅に下げられたが、新原子力規制委員会委員長に推されている田中俊一氏はその時“食品摂取管理基準を下げる合理的な理由は全く無い”と発言されているという引用があった。そのような見識のはっきりした人が、“原子力ムラ”側の人間であったというだけで就任に反対する人たちがいるという。

これは差別ではないのか。以前、日銀総裁の人事でもあった。一面だけを見て、イデオロギー的、教条的にしか、人を評価せずに、所謂、魔女狩りに切り捨てる。このことによってどれだけ、国益が失われたのか？政治には合理性が無い。

そんな話題が、懇親会でも続いて、歌も交えて、元気に夜は更けた。幸い、オリンピックの開催日の前日である。

翌日 8時 30分。

まず、鳴子温泉を出発し、47号を南下し、398号線に入る。この道は比較的、震災の被害が無くて、内陸部と沿岸部をいち早く、繋いだ唯一の救援路であったという。南方町に入り、道の駅で、最初の休憩を取る。引き続き398号（ここでは元吉街道と呼ばれる）を進むが、道路工事があちこちで続いている。墓地の補修だけでなく、再築、あるいは、補修された家が目立つようになる登米市を経て、北上川を越えて、南三陸町に入る。入谷という地区があるが、昔からの農産物の集散地であるという。震災後ここはおにぎりなどの炊き出しの基地になったという。さらに進む、車は八幡川を左に見ながら、南三陸町の市街地に向けて進む。やがて、川岸の左の森には赤茶けて枯れた杉が並ぶようになり、一方、道路の右側には、家屋はなくその基礎だけが残った住居の跡が連なってくる。ここまで津波が遡上したことを示している。海嘯は、狭い八幡川を、酷くも、あらゆる物を巻き込んで、遡ったのである。

南三陸町ここだけで、死者、行方不明者は900名にも及ぶと言われる。町の中心部であった志津川地区は消失した。志津川高校から津波を撮ったビデオはあまりにも有名だが、志津川高校、志津川中学、志津川小学校はいずれも高台にあり、それぞれ避難場所としての役目を果たした。一方で、南三陸町の市街地は壊滅し、本来、防災、救援の拠点であるべきであった、前述の町役場と防災庁舎、消防庁舎、南三陸町病院などは壊滅的な打撃を受け、安全にという配慮で構築された鉄筋コンクリートや鉄骨の構造物は残されたが、ただそれだけであった。瓦礫はかなり整理されたが、まとめられてあちこちに山積みとなっている。今でも少し異臭がする。焼け野原という言葉がある。しかし、津波によって全て浚われて、鉄筋コンクリートや鉄骨や一般家屋の基礎だけが残った風景をなんと呼べば良いのだろう。町の中央から海の方角を見ると、所々に瓦礫の山が残る一面、泥土の原なのである。泥漠という言葉があるとすれば、それに近い。南三陸町における別の被災地である清水浜にまわる。海岸に沿った道路は復旧していないので、低い山を越える道路である。役を果たせなかった水門は無残な姿を晒し、気仙沼鉄道の清水浜駅は線路やその架台まで破壊されたまま放置されている。志津川もそうだが海岸には徒歩以外では近づけない。

戻ってきて南三陸さんさん商店街で昼食をとる。思わず、近くに高台は？と気になる場所ではあるが比較的海岸から距離のある所に仮設されたプレハブの土産や食料品も売る商店街である。志津川だこは昔からの志津川の名物である。タコ漁の復活を支援する南三陸復興ダコの会というのがあり、南三陸の人気キャラクター「オクトパス君」は震災の後、支援のシンボルとなり、支援の証として、多くの人に配布されたという。このキャラクター

グッズも町の経営だと思われるオフィシャルショップで売っており、心ばかりの義援金のつもりで一つ購入する。

南三陸町を出て、死者、行方不明者をあわせ約 4000 人の犠牲者を出したという石巻に向かう。南三陸町と石巻市は隣接するが、海岸側の道路は使えないので、山側の 45 号線に出て石巻に向かうことになる。曲がりくねる道路と川のおかげで、何度か旧北上川を渡る。北上川は石巻で治水のためであろう北上川と旧北上川に分かれる。市街地に入るのは旧北上川である。橋は復旧されている。この震災の中で石巻の救急医療の拠点となった石巻赤十字病院のそばを通る。この地点は旧北上川とも少し離れ、海岸からは約 6km くらいあり、病院の建物そのものは、免震構造であったため、被害は殆ど無かった。発災直後の 14 時 50 分には災害対策本部を立ち上げ、その 35 分後にはトリアージを始める。実際には直後は、患者は病院へのアクセス手段が絶たれていて来院の人は、少なかったが、自衛隊の参加や他場所の赤十字病院の医師の参加も得て、往診医療も始める。この間の記録は自らの手で纏められている。貴重な資料である。そこには、どこかの官邸とは違う訓練された鮮やかさがある。

津波は旧北上川を真ん中にして、兩岸の家屋や車や人を巻きこみながら遡上した。惨くも遡る海嘯がおそったのであるが、石巻自体は、旧北上川兩岸に広がる大きな海岸線を持っているので、抉るような海嘯にはならず、その代わり広い地域を一気にさらって行ったように見える。その時、舟や船を陸地の奥まで運んだ。陸に運ばれた船の燃料に火がついて広い地域で、火災を起こした。見渡す一面は、ところどころに、建物を残し、瓦礫の山を残す、泥漠である。南三陸町でも同じであるが、車は所持者の了解がないと処分は出来ないという理由で、回収された車が、瓦礫と同じように高くつまれている。重機はいたるところで、動いている。ようやく、あたりが片付いて、復旧復興の緒についた段階かもしれない。

ある程度復旧された道路を通ってまず、魚市場に向かう。1メートルは沈下したと思われる地盤のかさ上げ工事の最中で、仮設市場くらいあるのだろうという期待は見事に外れる。まだ時間はかかる。

その後、震災見学で大型バスも来る門脇小学校に行く。船や舟が流され、海に開いた校庭に乗り上げ、ここの船の燃料に着火して火災が起きた。児童は裏山に逃れて無事であったと言うが、残されたコンクリートの校舎はその炎に炙られ、未だに黒ずんで残っている。

最期に、日和山公園に行く、町の真ん中にあり、眼下に市街地とそこを貫いて流れる旧北上川を望む、避難者はここから、荒れ狂う海嘯に息を飲みながら、眺めた場所でもある。

石巻の海岸線は長いが旧北上川を上った海嘯は内陸に達している。しかし、高台も遠くはない。この日和山も、市街地に近い門脇小学校の裏山も海嘯の中に残った高台である。この高台が、幸不幸を分けたことはよくわかる。南三陸町でもよく見かけたが、1m くらいの段差で、上では家屋が残り、低い位置では家の基礎しか残っていないそのような光景をいくつも見た。矢野先生によれば、膝の高さくらいところまで津波が来ると体ごと持つ

東北旅行記

ていかれるという話であったが、そのことを如実に物語っている。

実際に目にした部分は少ない。ただ、道中、矢野先生やマイクロバスの運転手からも話を聞く。児童の約7割を亡くしたという北上川のそばにある大川小学校の悲劇はあまりに有名だが酷い。それほどは標高の高くはないが、海岸から4kmも離れている小学校が震災時の一次避難所に指定されていたという油断もあったろう。あらためて避難先を求めた場所の判断の間違いもあったろう。何人か逃れた裏山はお年寄りの足でも、僅か5分の距離であったと言われている。北上川を遡る海嘯は、それを許さなかった。これと比較されるのがその裏山の片側にある雄勝小学校である。狭い入り江を遡る津波から裏の高台の神社にいち早く逃れたのである。幸、不幸を分けたのは瞬時の判断であったに違いない。私達は、かつて、“歯をだすな”と言われながら、事故に対する、あるいは事故を防止するための訓練を重ねた。実際の事故は訓練どおりはいかない。想定外のことも多い。逆説的な表現だが、だからこそ訓練は必要なのである。今回は色々な事例がそのことを証明してくれた。

各所で仮設住宅も遠望したが、一方では高台移転なども含めて新しい土地利用の計画は決まっていはいないように見える。又、同じことを繰り返すのであろうか、優柔不断は日本人の性のようにも見える。

思いのほか、津波の傷跡が見えない松島に寄って仙台に出て解散する。17時であった。

海嘯とは満潮の際に潮流の前面が垂直の壁となり、砕けながら川の上流へさかのぼる現象で、世界ではいくつか見られる現象であるが、これが転じて津波を意味する言葉として使われてきた。何故、転じたのか今回の震災による津波でよくわかった。津波は川や入江を抉るように遡上してくる。

正岡子規が、新聞「日本」の記者として、25000人の犠牲を出した明治三陸大津波（明治29年6月15日）の1週間後、仙台から気仙沼取材した。

そのあと、「海嘯」と題する14句を無署名で発表する。

どの句も胸を打つものがあるが

「生き残る骨身に夏の粥寒し」

「五月雨は人の涙と思ふべし」

「臯月（さつき）寒し生き残りたるも涙かな」

などである。

詞書に

「海嘯再び到るなかれ」とあるという。

人は、寺田寅彦が言ったようなことを繰り返すのだろうか。

被災され、亡くなられた皆様に、改めて、ご冥福をお祈りもうしあげます。

（おわり）